

『実例詳解古典文法総覧』補遺稿^十源氏解読

連載第 62 回 第 11.4.8.4 節～第 12.1 節

2020 年 7 月 15 日

小 田 勝

366 頁「11.4.8.4 数詞の読みかた」から。まず、類例をあげる。

- ・よそか (=40 日) (信明集)
- ・ももち (=100) (千載・序)
- ・みつももちむそぢ (=360 日) (堀河百首)
- ・ふたちさと (=二千里) (露色随詠集)

「 $10 + \alpha$ 」は、用例(1)のような「とをあまりふたつ」のほかにも、「とがへり(返・廻)ふたつ」のような言いかたもある。

- ・さきの天皇 (=高倉院) の国しろしめすこと、十廻り二の春秋を送り迎ふるあひだ (高倉院升遐記)
- ・十返り三つの春秋は 九重にてぞ過ぎ来しを (土御門院女房日記)

用例(4)(16)に対し、「神無月はつかなぬか (=10 月 27 日)」(恵慶集・詞書)、「はつかひとひ (=21 日)」(同)という例もある。用例(16)の類例、

- ・十日余りひと日過ぐるも悲しきにたつさへ惜しき神無月かな (土御門院女房日記) < 前文「十月十一日に隠れさせおはします。つごもりに暮れゆく空を見れば、うらめしくて」>

次例は年齢を詠み込んだ歌である。

- ・十歳あまり八歳の春の夢さめて子日にあへる松のあけぼの (蒙求和歌)
- ・六十あまり四歳の冬の長き夜にうき世の夢を見はてつるかな (風雅 1984)

なお、「a あまり b」で、「 $a < n < b$ 」の意を表すこともあるから注意。次例は、「二十歳を過ぎ、三十歳位の女」の意である。

- ・水の辺を二十あまり三十ばかりの女、中結ひて (=中帯ヲ締メテ) 歩み行くが (宇治 4-5)

「a つの b」は「 $a \times b$ 」を表す。

- ・経にける年を 数ふれば いつつのとを (=50) に なりにけり (千載 1160)
- ・積もれる年を しるせれば いつつのもつ (=30) に なりにけり (古今 1003)

分数は、a を分母として、「a 分 b」「a が b」で表す。

- ・[右大臣顯忠ハ] 大臣の作法をふるまひ給はず。… [普通ノ大臣ノ] 四分一の家にて大饗し給へる人なり。(大鏡)
- ・[楽曲ノ] 目録広げて「はやはや仕れ」と勅定ありければ、いみじく吹くものは半分なり、わづか三分一に過ぎざりけり。(文机談)
- ・堂舎を建てたり。その砌^{みぎり}すでに三が二(=2/3)に及ぶ。(東関紀行)
- ・これをありし住まひにならぶるに、十分が一なり。(方丈記)〈この作品中に、ほかに「三分が一」「百分が一」の例がある〉

さて、これで第 11 章の補遺稿を終えるが、最後に、第 11.2.2.1 節 323 頁の用例(15)～(17)について、有名な『徒然草』第 31 段が、この語法が核となっているので、補足しておく。

- ・雪のおもしろう降りたりし朝^{あした}、人のがり言ふべきことありて、文^{ふみ}をやるとて、雪のこと何とも言はざりし返事^{かへりごと}に、「この雪いかが見ると一筆^{ひとふで}のたまはせぬほどの、ひがひがしからん人の仰せらるること、聞き入るべきかは。かへすがへす口惜しき御心なり」と言ひたりしこそ、をかしかりしか。(徒然 31)

余白があるので、第 12 章に入ることにする。まず、367 頁「12.1 格」。用例(1)(2)のように、表示されていない格の想定は、一般には容易であるが、表示されていない格助詞が不分明な例も色々ある。例えば、次例の「 ϕ 」は、下の a b に照らして、「の」の非表示か「を」の非表示かはっきりしない。

- ・「さりや。年 ϕ 経ぬるしるしよ」とうち笑ひ給ひて(源・未摘花)

a 人をあひ見で年の経ぬれば(大和 159)

b 年を経て思ひわたりけることの(源・若菜下)

次例は、和文で、ガ格・ヲ格・ニ格の格助詞のすべてが一度に表示される例である(見つけるのは案外容易ではない)。

- ・せうとの(=兄ガ)花を仏に奉る。(四条宮主殿集・詞書)

[出典追加] 土御門院女房日記①土御門院(1195-1231)に仕える女房③新注和歌文学叢書 12⑤和歌が文章より 1・2 字分下げて記されていて、家集的な日記といわれる。書名は不明で仮称。／露色随詠集①鏤也^{ろしき}(1149-1230)③新編国歌大観 7

源氏物語（湖月抄） 解説 桐壺（7）

（増註版 15 頁、
新全集 25 頁）せめて女御とだけでも呼ばせずに終わってしまったことが、もの足りなく残念に思わずにはいらっしゃれないので、せめてもう一階級上の位だけでもと、追贈なさるのだった。これにつけても、非難なさる方々が多い。ものの情理をわきまえていらっしゃる方々は、（亡き更衣の）姿や容貌などが素晴らしかったこと、気立てがおだやかで感じが良く、憎み難かったことなどを、今になって思い出しなさる。見苦しいまでの（帝の）御寵愛ゆえに、（女御たちは）冷たく妬みなさったが、（桐壺更衣の）人柄がやさしく、情愛の深かったお心を、帝のお側付きの女房たちも互いに思い出して恋しがっている。「亡くなって初めてその人が恋しく思われる」という古歌は、このような場合をいうのだらうかと思われた。あっけなく日数が過ぎて、後の法要などにも、（帝は）ねんごろに弔問なさる。時がたつにつれて、（帝は）どうしようもなく悲しく思わずにはいらっしゃれないので、女御、更衣たちへの^①渡御などもまったくなさらず、ただ涙に濡れて日を明かし暮らしなさるので、お見申し上げる人までも涙がちのしめっぼい秋である。「亡くなった後まで、人の心が晴々できそうにない^②御寵愛の受けようだよ」と、弘徽殿などにおかれては^③今もなお容赦なくおっしゃるのだった。

（注）①「御方々の＝御方々への」。『総覧』333 頁参照。 ②原文「人の胸あくまじかりける人の御おぼえかな」。この「ける」は「気づき」の意だろうが訳出できない。 ③原文「弘徽殿などには」の「に」は尊敬すべき動作主を表す。